

私にとっての聞其名号

ご讃題 「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。きくといふは、本願を聞いて疑ふころなきを「聞」といふなり。またきくというは、信心をあらはす御のりなり。「信心歡喜 乃至一念」といふは、「信心」は、如来の御ちかひをききて疑ふころのなきなり、
(Ref「一多証文」註釈版聖典 P677)

一、名号讃歎の系譜と聞其名号の構造

ご讃題は第十八願成就文です。その名号を聞いて信心歡喜する「其の名号」は第十七願成就文の「諸仏如来の名号讃歎」を指しています。「阿弥陀如来の威神功德の不可思議なるを讃歎する」等という大それたことは私達三毒の煩惱の持主には不可能です。仏徳讃歎は仏にして初めて可能なのですから歴史的には一仏一国土のお釈迦如来が最初です。

その尊いお姿が七高僧を経て親鸞聖人に伝わり、お弟子様、我らが篤信の父祖に伝えられ、如来様のお慈悲をお慶びなされたお爺・婆さんの感動の後姿が私に伝わったことが判ります。

私には「仏徳讃歎」等という大それたことはできませんけれども「南無阿弥陀仏をとらふるは、仏をほめたてまつるになるとなり(『尊号真像銘文』註釈版 P655)」とご開山は仰せです。

阿弥陀如来様のみ手ですべて仕上げたお名号を称する行いによって仏徳讃歎になるというのです。なんとありがたいことでしょう。

私一人でも「南無阿弥陀仏」と称えれば仏徳讃歎することになるので、「聞其名号」とは、称えれば聞こえて下さる「南無阿弥陀仏」のお名号に聞き入ることが私にとっての「聞其名号」になるのです。

二、型から入る日本文化

およそ道と称される日本文化は型から入ります。茶道、華道等の芸事、柔道、剣道等の武道等枚挙に暇がありません。

昔、高校一年のときの担任の数学の先生が私たち生徒におっしゃったことです。「問題を解く力は演習問題を繰り返し解くことによって自ずから身に付く。だから演習を疎かにしてはならない」と。野球部部長でもあらせられた先生はこういうお警えを示された。「外野フライの取り方の説明を聞いて判った丈では外野フライを取ることはできない。繰り返し練習して体に覚え込ませなくてはならない」と。

「型から入る」ことの意義を尋ねてみますと、仏教でいう「身口意(しんくい)の三業(さんごう)」のうちの身業(しんごう)(口業(くごう)も身業の一つ)であることに気づきます。面白いことに口業は身業でありながら、口に出したものは自らの耳に聞こえるという不思議な効果をもたらします。一方、意業(いごう)は、心の行いであって、外観することができません。

三、信心獲得に際して型から入ることは可能か

「信心は、如来の御ちかひをききて疑ふころのなきなり」から確認できる通り、「信心」とは「無疑心」であることがわかります。そうすると信心獲得は意業に見えますが注意が必要です。なぜなら、ご開山は「私が疑わない」とおっしゃらず、「疑う心がない」とおっしゃるからです。

では、古来、信心獲得の型はどのように捉えられたのでしょうか。

思えば、浄土真宗で伝統的に大切にされた「お聴聞」が信心獲得に際しての型に当たるのだと見られます。

なぜなら、「本願を聞いて疑う心がない」のを信といい、聞というからです。ここから「聞即信(もんそくしん)」が導かれました。

では「聞即信」でどのような効果がもたらされたのでしょうか。

お聞かせに与ったまま頂戴することを「信」として、信心に無用の要素(これを自力の計らいと称する)が入り込むのを避ける効果が第一点。

更には「聞即信」と「信」を「聞」と捉えることによって信心獲得の具体的な道行を示されたのだと見られます。これが第二の効果であります。

聞ならば型を示すことができます。それが「お聴聞」です。

そうすると、一たびのご法座で判ったから十分ではないのです。

ご法座で布教使はご門徒に判り易いお話をするように心がけますから一度のご法座はご法座なりに判って当然です。けれども、ご本堂の石段を二三段降りた途端にご法話の中身がすりぬけます。更に、山門を出ればすっかり忘れるとはよく言われる謂いであります。

高校生の数学演習・野球部の練習しかり、お聴聞しかり、繰り返し繰り返し体を通してすり込ませることによって獲得できる真実があります。

繰り返しご法座に歩みを運ぶ「お聴聞」を通して、やっと「信心獲得」が可能になるのです。この事実を疎かにしてはなりません。

およそ「道」といわれる日本文化は凡夫が営む型から入って凡夫の三業を超える奥義に迫ったのであります。

浄土真宗も仏道という道です。仏道ならばこそお聴聞という型を崩してはならないということになるのであります。

四、信前行後の伝統教学は得策か

二百年前の三業惑乱直後の問題意識に立脚する伝統教学は、信前行後の教学的立場をとり続けています。親鸞聖人の教行信証(ご本典)における教学は行信一具の法門ですから信前行後の教学は実は親鸞聖人のみ教えではないことは明らかですが、ここではこれ以上触れません。

代わりに、信心獲得が先で、念仏は信心獲得後の報恩感謝の念仏に限るべきとする伝統教学の立場が信心獲得において得策かという視点で

考えてみることにします。

そうすると「お聴聞」というプラクティスがままたらなくなった今日、信前行後の伝統教学はおよそ「道」という日本文化を獲得する方法論に違背している点で得策ではないのではないのでしょうか。

これがまず一つの結論であります。ではどうすればよいのでしょうか。

五、名号のいわれの通りに聞くのである

「聞即信」を押える「聞信義相(もんしんぎそう)」において明らかにされた「名号の謂れの通り」に聞くこと(これを「如実の聞(によじつもん)」という)の意義を再確認すればよいと考えられます。

「名号のいわれ」は「六字釈」(註釈版聖典 P170)に明らかです。

「六字釈」でご開山は、「南無」には「帰命」と「発願回向」の二義があり、「帰命」は、本願招喚の勅命なり。「発願回向」といふは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり」とお示しです。

よって、ご開山に導かれてまずは「南無阿弥陀仏」と称えるのです。有難いことにそれが如来様のお徳をお讃えすることになるのです。

称えれば、「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さいます。

聞こえて下さったものは「如来様直々の御喚び声」と頂戴するのです。聞其名号の「聞名」です。お喚び声によって愚かな私が喚び覚まされるときが、ついに疑の蓋なくなる信心獲得のそのときだからです。

凡夫の身口意の三業を超える信心獲得へのみちゆき「私にとっての聞其名号」がこうして明らかになることであります。合掌(玄宥記)。

子供の集い(キッズサンガ・降誕会) 五月十七日十三時半より
正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒五二〇 〇五〇一滋賀県大津市北小松四五二番地 ☎0七七 五九六 〇一九六
FAX 0七七 五九六 〇一九七 [mx-ll mhkatata@mx.scn.tv](mailto:mhkatata@mx.scn.tv) 使務 堅田玄宥
HのOΠΛαφミカハレ長一イターカ <http://www.isoreed.net>